

## 桜田武

ある会社の新築ビルの落成式で、偶々私は桜田武氏と同席した。

私が、「桜田さん、あなたのオフィスはひどいですね。あの社長室には私のような大男はいりませんね。日清紡ほどの会社ですもの、一つ大きい近代的なビルをお造りになつては」とけしかけてみた。

ところが当の桜田さん、明るい微笑をたたえつつ、「君、立派なオフィスをつくつて辺幅を飾ろうとするのは大抵アブレだよ。貧乏人の悪い癖だよ」と言い放つて一向に取合わないのである。

「今の日本に資本主義が生き残つていとも思えない。私有財産権が確立されていとも思われない。財産なんてどうでもよいのだ。私の収入の八割までは税金とか寄附とかでもって行かれて、毎月赤字の貧乏暮しだ。唯私は自由を欲するのだ。犬や豚のように自由を奪われた生活は人間として耐えられないことだ。何としてもこの人間の自由を守り抜くのが政治の生命でなければならぬのだが、今日の既成政治家には大きい期待がもてない。国民の一人として私自身が先づ頑張るんだ」というのが、最近の桜田さんからよく聞く述懐である。

四十一歳で日清紡の社長になつた桜田さんは、謂わば財界人としてよき星の下に生れた第一等の幸運児である。安逸を貧ろうとすれば彼ほど条件に恵まれた人はいない筈である。しかし彼の胸中に去来する人間としての苦悶は、今日の危局において今言つたようなギリギリの境界を彷徨しているのである。為政者はもとより国民としても、十分味得すべき言葉であるように思われる。

( 昭、三〇・九 )